1

近代医学・薬学発祥史

辰野　美紀

日本薬史学会／順天堂大学医学部医史学研究室

近代医学・医療・薬学とは，その発祥時においてどのような概念を選択し，採用し，更にそのなかの何を拡大し，あるいは以前あったものの何を排除して成立したものであるのか？を歴史的地層の中から発掘することを，本研究は目標としている．

その研究法であるが，歴史研究には様々の方法論が存在するが，その中の 1 つとして次の様な手法を採ろうと考える．それは，M. Foucault が Archéologie（考古学）と呼んでいる思想史研究法であり，「歴史そのものを述べようとするよりも，歴史を可能ならしめた諸条件を発掘するものであ」り，「それには歴史の通時的な縦軸を横に切って，その横断面をしらべる．つまり，ある時期に，文化の諸領域にわたって，どのような共時的な現象が起っているかをみわたし，当時の人びとの認識や知覚の構造を分析することによって，ある領域での歴史的変化がある時なぜ起ったかを理解しようとする．」（ミッシェル・フーコー著，神谷美恵子訳：臨床医学の誕生―医学的まなざしの考古学，みすず書房，1969，p. 314）という方法である．しかし，それは，当時の最もオーソドクスな世界観を唯一なものとして，その時代を判断するというような歴史の決定論に陥ることを意図しない．近代医学・薬学をめぐる広い領域やその反作用をも含む豊かな重層的な視野を忘れたくない．また，当然のことながら，当歴史研究においては，歴史の第一次資料を尊重する姿勢を保ちたい．その上，まだ紹介されていない新事実の発掘を通じて，この時代を生き生きと活写ができればそれを目指したい．

現在までに，いくつかの研究をまとめ，以下のように発表してきた．

（1）M. Foucault の「臨床医学の誕生」では語られていない臨床薬学の活動が，18 世紀末から 19 世紀初めのフランスで行われていたことを発掘でき，それを日本薬史学雑誌に報告した．

第 1 報　28（1）20–27（1993）

第 2 報　28（2）73–79（1993）

第 3 報　29（3）489–497（1994）

また，第 32 回国際薬史学会（ISHP）（1995 年・Paris）で口頭発表を行った．

その仏文と和訳は，日本薬史学雑誌 32（1）88–92（1997）に報告している．

（2）M-X. Bichat の病理解剖学（anatomie-pathologique）の導入について分析した．

（3）パリの薬剤師らによって，薬用植物の本体を目に見えるものとして示そうとした単離・結晶化・特定について報告した．第 5 報 32（2）200–205（1997）．および第 34 回国際薬史学会（1999 年・Firenze）で口頭発表した．

（4）F. Magendie の処方集の出版とその先駆的研究が周辺諸国に与えた影響については，薬学会年会で報告を行った．（Magendie F: Formulaire pour la préparation et l’employ du plusieurs nouveaux médicaments（1821））

今回は，（5）として，化学 chemie の成立と応用，さらにその世俗化の中の，生化学がまだ成立する以前の臨床化学検査法，また，栄養学などについて分析する．